

とうとう、ここまで来た

— 1999年を送る —

大村 恵美子

現在1999年から2000年を迎えようとしている私たちと同様、1700年に15歳となったバッハは、世紀の変わり目を経験しています。10歳で両親を失い、長兄の家で5年間養育されたのち、バッハはこの年、自立の道を求めてリュネブルクの給費生生活へと旅立つのです。それからさらに半世紀、1750年に、おびただし作品の至宝を残して、彼は世を去ります。2000年は、バッハ没後250年という、記念すべき年でもあるのです。

<死>を主題にする

わが東京バッハ合唱団も、1962年誕生以来、とくに1979年に私自身が指揮をするようになってからは、バッハの作品をかなり綿密に時代順を追って、バッハのライブツィヒ後期まで辿りつきました。彼の死を記念する来年のプログラムは、作曲年代順にはとらわれないで、わが合唱団としてもっともふさわしい形でと考えて、次のような5月の定期演奏会の構成となりました。

カンタータ BWV156、BWV106、BWV56、ミサ曲ト長調 BWV236。そのうえさらに、アンコール曲目として、私の希望では、オルガン・コラール BWV668<主よいま御身のみ座にわれ進みいで>を草間美也子さんに弾いていただいて、ひきつづき私の訳でそのコラールを4声体で歌えたら、と考えています。バッハの死の床での絶筆とされているこの曲は、一見、淡々と流れる平静な旋律で、それがかえって大バッハのみごとな死の受容を私たちに伝えてくれるようです。

こういう、1750年7月28日のバッハの<死>と、20世紀の<終末>という、節目での主題は<死>であるわけですが、私はあえて、定期演奏会のタイトルとしては、<2000年よみがえるバッハ>と名付けようと思っています。死がすなわち復活、という想いは、キリスト教的伝統にある文化では、それほど難解なコンセンサスではないと思います。

生き甲斐に富む未来の展望

さて、21世紀を前にして、私たちがとくに願うことは、まず第一に、人類が存続するためにぜひとも不可欠な、地球の保全でしょう。そして、その地球上について一つの人類として運命を共にすることが可視化されるに至った、全民族の殺し合いの中止と、共同で託されている資源の公平な管理・分配です。

私はかねてから、大人が子供たちに同情して、「こんな世の中に生きていくのだから、ニヒルになるのも無理はない」式の態度をとるのに、待てよ、という気持ちを感じています。たしかに、怪物的な「物」の逆襲を招き、そのコントロールのきかなくなった物量をもって桁外れの殺戮を重ねたのが、20世紀でした。そのことについて、歴史をけがし、地球をけがし

た罪を、私たちはどれほど次代の人々にあやまっても、済むことではないでしょう。けれども一方、このものすごい試行錯誤を経て、地球も人類も一つ、という実感をやっと初めて手にしたのではないのでしょうか。そういう時代は、かつてありませんでした。自分の生活圏、国家、文化圏のために、人々は労苦を惜しまず働いてきました。でもこれからは、一方によいことが他方には悪いことになる、という価値観の衝突は、現実問題として、不可能となってくるのです。宗教も哲学も経済も政治も、自分の貢献が即、世界全体への貢献になることしか生き残れないのです。それを思えば、未来を担う若者たちにとって、こんなに生き甲斐のあるパースペクティブは、大いに喜ぶべきものではありませんか。

人間中心から脱却して

今年になって、NHKテレビの〈生きもの地球紀行〉のエンディングソングを、EMコーラスがとりあげ、折りあるごとに歌ってきました。私は、最初にその歌詞をみたときに、ちょっと疑問を感じました。長いかもしれませんが、ご紹介しますと――

- | | |
|--|--|
| 1. たとえば君が 傷ついて
くじけそうに なった時は
かならず僕が そばにいて
ささえあげよ その肩を
世界中の 希望のせて
この地球は まわってる
いま未来の 扉を開けるとき
悲しみや 苦しみが
いつの日か 喜びに変わるだろう
I believe in future
信じてる | 2. もしも誰かが 君のそばで
泣きだしそうに なった時は
だまって腕を とりながら
いっしょに歩いて くれるよね
世界中の やさしさを
この地球を つつみたい
いま素直な 気持ちになれるなら
憧れや 愛しさが
大空に はじけて躍るだろう
(以下くり返し)
「BELIEVE」(作詞・作曲 杉本竜一) |
|--|--|

これは、地球上に生きている人間同士の助け合いの歌ととれば、感動的でもあります。しかし、テレビで映されるのは、野獣や魚などの生態だったりしています。その彼らが「傷つい」たり「泣きだし」そうになったりするのは、ほとんど人間からの侵略や圧迫・攻撃によるものなのではないのでしょうか。彼らにとっては、人間が「そばに」寄ってきたり、抱きしめたりされることが、恐ろしいのではないのでしょうか。どれほど膨大な動植物が、20世紀になって絶滅させられたことか。

私は、21世紀は、人間中心主義を脱し、自然を自然そのものに返す世紀だと思います。またあらゆる既存の宗教が、それぞれの狭い正義観、選民意識を全面的に改めて、これからは「殺生を、どんな理由であれ正当化するのは、宗教と認めない」ことでスタートラインを揃えてほしいと要望します。

バッハの、従容たる死の受容と、力強い生への復活を私たちも心に育んで、〈2000年によみがえる人間〉をめざして生きたいものと願います。

バッハのCD全集日本版を担当して

—杉山好先生による歌詞全曲翻訳が完結—

鈴木 徹太郎

来年のバッハ没後250周年の記念年に向けて、コンサートやワークショップが目白押しです。レコード会社各社もこのチャンスに乗り遅れることなかれと、大量のバッハ関連CDを発売することになります。クラシックCDを「飯の種」にする人種にとって、バッハは、モーツァルトと並ぶ「金の卵」なのです。私もその一員として、1年早い1999年、心行くまでバッハとお付き合いすることとなり、その顛末を書かさせていただきます。

さて、さすがにバッハは折り目正しく1750年没。西暦2000年という非常に切りの良い記念年を迎えるに当たり、ドイツのクラシック・レーベルであるテルデック社は、その名も「BACH2000」と題した全153枚組のCD全集を企画し、没後249回忌にあたる1999年7月28日に発売いたしました。バッハの全集は、教会カンタータ200曲なしには成立しません。アーノンクールとレオンハルトによる全曲録音を持つテルデックには、「バッハの全真作を網羅した世界初の全集」を企画する必然があったのです。

その日本版発売担当という大役が私のもとに廻ってきたのは、今年の春のことでした。それは私にとり、嬉しいというより、途方に暮れるほどの難問でした。この全集を日本で発売するためには、バッハの声楽曲の全歌詞翻訳をはじめとする膨大な日本語解説を用意する必要がありますからです。テルデックは、同全集の英語版、ドイツ語版、フランス語版、そしてスペイン語版を自ら制作しています。それに代わる「日本語版」を、我が国の高水準のバッハ研究をふまえ、かつ短期間に作成しなくてはならないのです。申すまでもないことですが、欧州語から日本語への翻訳は、固有名詞などを全て日本語に置き換えなくてはならず、その手間は欧州語同士の翻訳とは比較になりません。日本はかくも特殊な文化圏。「グローバルスタンダード」にはなかなか加わりがたいようです。

というわけで、まずは礪山雅先生に御相談をいたしました。先生には、東京バッハ合唱団で初めて知己を得て以来いろいろとお世話になっており、今回も数々の貴重なアドバイスをいただきました（教会カンタータの概説は自らご執筆しておられます）。その中でも、礪山先生が特に力説なさったのは、杉山好先生に歌詞翻訳の全てを託すべき、とのことでした。礪山先生は杉山先生の愛弟子であり、自らも多くの歌詞翻訳を手掛けておられますが、バッハ研究、特にその歌詞の翻訳に生涯を捧げてきた杉山先生によるバッハ全歌詞の日本語翻訳を誰よりも望んでいるご様子でした。

そこで私自身、杉山先生と「心中する」覚悟を固めました。大袈裟な表現ですが、CDを含む音楽出版関係者の間で、先生はその「妥協を許さぬ赤入れ校正」により、敬われ、かつ恐れられているのです。バッハ合唱団以来のお付き合いでもあり、先生に御連絡を差し上げたところ、東京大学退官後、教鞭を取っておられた恵泉女学園を古希をもって辞された直後とのことで、当方の申し出を即座にお引き受けいただけたのは、まさに幸運以外の何物でも

ありませんでした。

それから約4ヶ月間、杉山先生はほとんど1日も休むことなく、毎朝5時までお仕事に専念してくださいました。全187曲のコラール（ほとんどが世界初録音）や、多くの世俗作品が新たに翻訳され、ふたつの受難曲とオラトリオの福音史家の語りは新たに口語訳がなされました。「校正の杉山」の名にふさわしく、テルデック盤のドイツ語テキストにも、完膚なきまでの「赤入れ」がなされ、その結果、ドイツ語のテキストは、本国版よりはるかに質の高いものに生まれ変わりました。そうした懸命のご努力の末、先生が全てのお仕事を終えられたのは、ギリギリの締め切りの2日前。まさに職人の技！で、バッハへの妥協なき献身ぶりには、ただただ頭が下がる思いでいっぱいです。

もちろん、その「妥協なき姿勢」は、私共にも向けられました。まず先生は、テルデック盤教会カンタータのドイツ語テキスト文字組み（省スペース化を図っています）を批判されました。「この文字組みは、ドイツの精神世界が、EUの商業主義に敗北した象徴である」との先生の主張に対し、当方は経済的理由など説明いたし、結局「受難曲など大規模宗教曲のみ、先生の好きなようにしていただく」ことでご納得いただきました。先生はFAXをお持ちでなく、宅配便のような即物的な手段もお好きではないご様子で、必然、原稿や校正のやりとりはほとんど手渡しとなります。私がつてこ舞いなのご存じの先生は、何度となくレコード会社まで足を運んでくださいました。真夏でも背広を手放さず、トレードマークの野球帽をかぶってご来社になり、会社の打ち合わせ用ブースで、やりかけの校正を何時間も続ける先生のお姿は、マドンナだ、広末涼子だ、と普段働いているわが同僚にかなりの感銘を与えた様子です。

さて、その貴重な成果を皆様にご覧いただくためには...、全153枚の全集を買っていただくしかありません。CDサイズ全680ページにおよぶ杉山先生の歌詞対訳は、あくまでCDの付属物になってしまうのです。当全集への特別寄稿文を、先生は自らこう題されています——《バッハ声楽作品の全歌詞対訳の仕事をひとまず終えて～「付録」の仕事に喜びを見いだした一翻訳職人の現場報告》。先生の「妥協を許さぬ赤入れ校正」は、バッハに全身全霊を捧げたそのご翻訳を「付録」として扱う我々の安直な姿勢を諫めるためであったのだと、感じ入った貴重な4ヶ月間でした。

末尾ではありますが、20歳代に東京バッハ合唱団に加わらせていただいた経験が、偶然とは言え今回の仕事に結び付いた僥倖を、大村先生をはじめ皆様に感謝いたします。全集「BACH2000」（全153枚組・税抜価格¥220,000）について、ご関心をお持ちの方には、下記あて御連絡いただければ詳しいパンフレットなどをお送りいたします。実際の販売はレコード店経由となり、大きなレコード店ではパンフレットや商品展示もなされています。けっして廉価な商品ではございませんし、個別の演奏については、それぞれお好みもあろうかとお察しいたします。ただし、バッハの作品のすべてが（その歌詞対訳を含めて）、初めて入手可能となった意義はけっして小さくはないと自負しております。もし御興味をお

持ちいただければ、またお知り合いの方に御推挙いただければ、これに優る喜びはございません。

お問い合わせ先：107-8639 港区北青山3-1-2

(株) ワーナーミュージック・ジャパン

クラシック 鈴木あて

Tel: 03-5412-3232 Fax: 03-5412-3375

(東京バッハ合唱団元団員／現後援会員、(株)ワーナーミュージック・ジャパン勤務)

後援会会計報告

(1999年7月-9月)

収 入	348,000
内訳 後援会費	328,000
寄付	20,000
支 出	423,983
内訳 事務局費補助	210,000
渉外費	32,000
通信費	87,153
事務費	94,830
差 引	△75,983
前期より	404,720
累 計	328,737

後援会にご入会の方々

(1999年7月-9月、敬称略)

【継続会員】丹羽茂、渡辺美恵子、加藤剛男・よし子、関純子、鈴木徹太郎、市川由紀子、丸山真人、斎藤繁儀、務台孝尚、岩瀬房子、稲葉博子、松井啓子、青田健、鈴木靖、大塚剛宏、吉田佐貴子、箕浦正敏、黒田みつ子

【寄付】関純子

【切手多数】久保静代、久保木八重子

カントル・バッハ —— 連載 13

ポール・デュ・ブシェ

訳：大村恵美子

物語は、バッハの最晩年へと入ってゆきます。時と、人々の忘れっぽい記憶とが私たちに残してくれた物語の糸は、とても細い。おそらくバッハの生涯の終りは、ゆるがず、慎ましく、というイメージと言えましょう。バッハは、その活動全体の領域だった、あの狭い範囲の地域内を移動しています。オルガン検査のために訪れたアルテンブルク、ゲルリッツ、チョルタウ、ナウムブルクや、いつも彼を歓迎してくれたドレーズデン、エマーヌエルの住んでいたベルリンなど。

第6章 <音楽の献げもの>

少なくとも社会生活において、バッハは影の薄い存在となりました。自分の任務に関わる活動からは、だんだん遠ざかり、大詰めに物語る内なる声に、いっそう近づいてゆきます。そして活動生活の繊維をしっかりと結びつけていた糸は、今ではゆるめられ、同時に、それが<カノン風変奏曲><音楽の献げもの><フーガの技法>等、バッハの全作品のなかでももっとも抽象的で、もっとも主張のはっきりした、もっとも純理的な作品群の横糸を織っています。

イラスト(13)

プロイセン王フリードリヒ二世の肖像。シャンティエ、コンデ美術館。

C.Ph.エマーヌエルは、プロイセンのフリードリヒ王のオーケストラでチェンバロ奏者をつとめたが、音楽家としての王からは、正当な評価を得てはいなかった。バッハの次男[エマーヌエル]は、それをたいへん苦にしていた。或るフランス人の批評家に、彼はこう言っている。「王が音楽を愛していると、あなたはお思いですか？ そうではなく、王はフルートしか愛しておられないのです。そして、王がフルートを愛しておられると言うのも、まちがいです。王は、<王自身の>フルートしか愛しておられないのです。」

◇今回から、文体を<です・ます調>に改めましたので、ご諒承おねがいします。この企画の初めに、ライプツィヒ期にあたる、5・6章だけをご紹介するつもりで訳しはじめましたが、この夏に、1章から6章までの全体を、<です・ます調>に統一して訳し終えました。いずれ全文を、来年の「バッハ没後2000年」の記念としてまとめ、合唱団関係の皆さまに読んでいただけたら、と考えています。(訳者)